

俳人蓼村 (上巻)

郡中地方の門人 資料

栗田吐岳・栗田砥岳(くりたたとく)

文化4年〜明治39年(1807〜1906)

本名栗田故六

砥部川井の影浦広之承義勝の次男に生まれ、九年間実父から漢学を学んだ。

下吾川本村の庄屋栗田家に来て養子相続した。自宅で子弟の教育に当たった。弟子には、田中守太郎・上城戸市太郎・沖長太郎・田中久吾・岡為五郎・三好文五郎・新井市太郎・西城戸辰次郎・廉田藤五郎などがいた。学制発布後は、千丈小学校の教員となった。実名は故六であるが、常に彦六を用い伊豫岡八幡宮寄進の石にも彦六とある。

嘉永三年(1850)に妻ルイを失い、後妻ワカも明治三十五年に故六に先立って死去した。小柄な人であったが、いわゆる口八丁、手八丁で、細工物に優れていた。忍術も試みたという。

俳句は砥岳と号し、明治二十六年(1803)宮内木虬の長男寿一郎の死に当たって、追悼句を出している。この地方の俳句指導者で、死後十周年に、追悼句会が行われたという記録がある。

墓は、伊予市下吾川の馬塚墓地にある。
(出典 伊予市の俳諧史 六十二頁の意訳)

※参考 栗田砥岳は、仲田蓼村の十四才年下

なお、この冊子には、俳人砥岳の明治期は紹介されていますが、蓼村の生きた幕末期の紹介はありません。

栗田砥岳関連資料

栗田与三郎(くりたたよさぶろう)

地方行政に尽力 郡中村村長一八四七―一九二三(弘化四―大正一一)年 一八四七(弘化四)年一月三日、下吾川村栗田故六の嫡子として誕生した。名は中挙、幼名を八太郎といった。性格は温厚で慈愛心に富み、廃藩当時には下吾川戸長となり一八八〇(明治一三)年まで勤続、一八九〇(明治二三)年には郡中村助役となった。その後、村長・区長・村会議員にしばしば当選して村行政のために尽力した。また、郡会議員にも選ばれ、議長にもなって伊予郡政に貢献した。一八六五(慶応元)年より種々の名誉職に就き、地方行政面に手腕を発揮したが、この間、毎日出勤して仕事に励み、一年一日のごとく勤めてやまなかつた。富田池の拡張工事及び八反地隧道築造の際には、西城戸鹿次郎らとともに世話人となりその完成に努めた。また、八反地池増設費として数百万を寄付して工事のために寄与した。日露戦争の際には、出征して勲功をたてた。小作者に対しては常に温情をもつていたので、慈父のように仰がれ小作争議は一度もおこらなかった。一九二三(大正一二)年八月一九日、七七歳で没した。

(出典 伊予市誌)

※参考 仲田蓼村弘化四年日記に、「嘉永七年(1854)、仲田蓼村宅(の)六十一之賀の来客に栗田与三郎の名前」が見られます。

千羅鶴丸・宮内角丸

(せんらかくまる・みやうちかくまる)

郡中地方俳壇の実力者

一八二三―一八九六(文政六―明治二九)年 本名宮内與八郎

一八二三(文政六)年五月二五日、郡中湊町向井治平の長男として誕生した。文政一〇年七月一五日、灘町の開拓者宮内清兵衛を祖とする分家の二代宮内與三郎の養子となり、三代をついだ。

仲田蓼村に師事して俳諧に精進し、

次第にその力量を高めていった。

一八六〇(万延元)年八月三津浜の俳人大原其戎は、『あら球集』二巻を出版したが、郡中地区からは二人・六〇句が載せられており、その中には、角丸の句も含まれている。なお『あら珠集』には、上野村・稲荷村・三谷村・大平村からも出句があり、俳諧への情熱がうかがえる。

彼は明治五年京都より帰臥した淡節に学んだと思われ、その実弟二人(青芳・枝丈)もまた行動を共にした。因みに、淡節は京都の桜井梅室宗匠の養子となつた俳人で、「花の本脇宗匠」にまで進んだ俳諧の指導者であつた。

(出典 伊予市誌)

※参考 宮内角丸は、仲田蓼村の三十才年下

なお、宮内與八郎保久は、宮内清兵衛を一代目とすると六代目に当たります。

宮内木虬 (みやうちもつきゅう)

郡中俳壇を代表した俳人で町発展の功労者 一八四〇―一九一五

(天保一一―大正四)年

本名宮内小三郎昌信

藩政時代牛飼原を開いた宮内兄弟の兄九右衛門の名を襲名し、一〇代目小三郎を継いだ。実名昌信。父小平太・母夕力の長男として、一八四〇(天保一一)年に生まれた。学問は、伊予郡南黒田村(現松前町)の庄屋で、漢学者・教育者であつた鷲野南村に学んだ。

当時松山地方の俳界は、松山俳壇の指導者であつた栗田樗堂の没後で、梅室・蒼きゆう・鳳朗などの有名俳人が郡中地方へも来遊した。木虬の師は花木欣舎で、幕末から明治へかけ、京都俳壇の権威者であつた。

木虬が有名になつたのは、明治一四年後に郡中町長になつた豊川涉とともに武知五友が提唱した「郡中八景」を題として作句を試みた。すなわち、南山積雪・米湊鳴蛙・谷上午鐘・稲荷翠嵐・紫海夕照・萬安夜泊・港浦漁戸・住吉松雨について、月並的でなく情緒豊かな作品(俳句)であつた。

明治二六年一月、木虬の長男寿一郎がその英才を期待されながら、わずか一七歳で亡くなつた。

回家にはこの永眠を悼んだ一枚刷りが残されていて、これに來賛した人々から、木虬の交流の幅の広さと、弔慰の情を表現した文学作品を味わうことができる。

その中の木虬の作

雪ふかく呼へとこたへぬ別かな

木虬

木虬は単なる俳人でなく、郡中灘町に明治初年開校の山崎小学校へ多額の寄付、郡中郵便局の創業時代その基礎づくりに参画、彩浜館の建設、伊予汽船の誘致、伊予商業銀行の創立など郷土発展への功績も大きい。

余生は一切の公職を辞し、灘町に住み、俳句・謡曲・魚釣りなどをたしなんだ。大正四年七六歳で没した。

(出典 伊予市誌)

※参考 宮内木虬は、仲田蓼村の四十七才年下

なお冒頭、「宮内兄弟の兄九右衛門の名を襲名し、一〇代目小三郎を継いだ」とありますが、正しくは九右衛門を一代目とすると小三郎昌信は「九代目」になります。また右記の「彩浜館の建設」伊予商業銀行の創立など」に同氏が貢献したという資料は当記載以外には見当たりません。宮内惣右衛門直吉と宮内小三郎昌信を混同して記載したものと考えられます。

仲田蓼村弘化四年日記 六十一之賀 栗田与三郎の名前がある頁(124)
翻字は、内子町の芳我明彦氏によります。

六十一之賀

嘉永七甲寅年

三月吉辰八日ヨリ十二日

迄之客

概要の説明

六十一之賀の記録からは、嘉永七年(1854)当時の蓼村の交友関係を知ることが出来ます。

来客の名前は、

蓼村の養子和四郎の実父、岡井九左衛門から始まり、三津の絵師樵眠まで、八十八人の名前が記載されています。

栗田与三郎は、十六番目に記載されており、この時、与三郎は七才になります。蓼村の学問の師であり、俳友でもあった陶惟貞は、十二番目に記載されています。

なお、宮内與八郎(角丸・この時三十一才)と、宮内小三郎(木虬・この時十四才)の名前はありません。

(年令は伊予市誌記載の生年から算出しています)

121

一、木綿 壺端 西岡弥右衛門

一、箱入扇子

一、同 壺端 本郡屋

一、生さかな 新太郎

一、酒 壺升

一、茂利川 壺端 梶野与右衛門

一、生さかな

一、箱入扇子

栗田与三郎

一、高機 壺端

一、生鯛 一折

大和屋

一、半紙 壺束

孫兵衛

一、箱入扇子

黒田屋

一、茶棚

三吉

一、箱入扇子

124